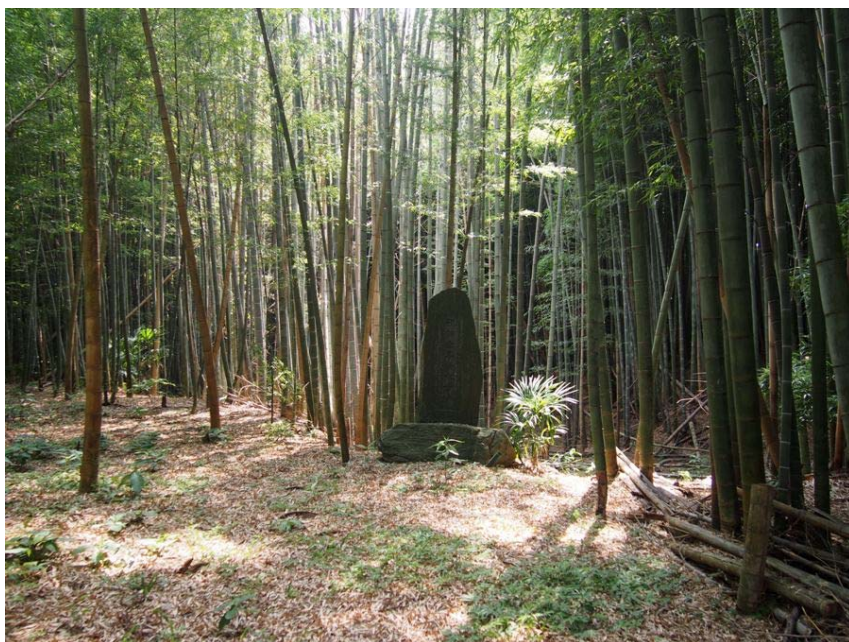


まほらに吹く風に乗って

<日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ>

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ (4)

府中六井と養老の滝伝説



ふるさと“風”の会

まほらに吹く風に乗って
＜日本の美しい風景と歴史のプチディクショナリ＞

ふるさと風の文庫

地域に眠る埋もれた歴史シリーズ（4）
府中六井と養老の滝伝説

木村 進

ふるさと“風”の会

(はじめに)

常陸府中(石岡)は酒の名所でもありました。そこには街を潤す豊富で良質な湧き水があったのです。

この湧き水を府中六井とって大切にしてきました。しかし水道の発達、開発により湧き水も水量が大幅に減り、また多くが枯れてしまいました。これらの井戸(六井)は必ずしも六ヶ所とは限らなかったようですが、かつて栄えた府中(石岡)の泉を探し巡ってみました。

石岡には関東養老の泉といわれる「親は諸白、子は清水」という伝説が残されています。こちらも同時に探って見たいと思います。

(目次)

(1) 府中六井(1)-杉の井	1
(2) 杉の井と茶屋場	4
(3) 府中六井(2)-石井の泉	8
(4) 府中六井(3)-小目井	12
(5) 府中六井(4)-室ヶ井と景清	17
(6) 府中六井(5)-鈴負井	20
(7) 府中六井(6)-野々井と大蛇	22
(8) 総社のおみたらし	25
(9) 村上のおみたらし	29
(10) 筑波六井	32
(11) 尾花散る師付の田井	34
(12) 井白の泉	38
(13) 養老の滝伝説-子は清水	39
(14) 養老の滝伝説-その意味するもの	43
(15) なま(鮮魚)街道と子は清水	47

(1)府中六井(1)-杉の井

さて、先日からあまり私にとっては縁の薄かった石岡の泉町を調べていました。

泉町の裏通り（ガラミドウ）から杉並の方に行く道があります。もちろん今は常磐線の踏切を越えて、更に柏原池から流れてくる山王川を渡るのですが、ここに府中六井といわれた井戸が残されています。「杉の井」です。



かつて、府中には清らかな泉が 6 か所あり、六井の泉と呼ばれたといわれています。

若宮八幡宮裏の「石井の泉」と、この「杉の井」、それから最近復活した貝地/田島の「小目井」には案内板の設置もできていますが、他は道路や田圃で消えて行きました。

まあ、もっとも現在はわずかに流れている「石井の泉」もほとんど面影はなくなっておりますが、大昔から良い飲み水は貴重で、これらの泉の美味しい湧水はとても生活に溶け込んで、信仰の対象でもありました。



ここ杉の井は江戸時代に水戸の殿様が江戸の行き来の時に、水戸街道沿いの杉並木の先にあった「茶屋場」でお茶をたしなむのに、この水が使われたそうです。



今はこの井戸にも水は枯れて出ていません。奥の小さな祠には「弘法大師」が祀られています。

(2) 杉の井と茶屋場

さて、府中六井と言われた泉の一つ「杉の井」の近くに茶屋場と呼ばれる場所があります。

石岡の一里塚（台風で片側の木は切ってしまいましたが、残った木も危険だからとして切られてしまいました。）があり、昔の水戸街道の名残を残す唯一のものとなっています。

昔、この一里塚の先には杉並木が続いていました。

しかし、ここの道路を広げる時に、昼でも暗く近代化の妨げとなると杉並木も切られてしまいました。

地名の「杉並」が残っていますので、わずかに思いだせるでしょうか。

さて、もう少し行くとその先左側に「水戸信用金庫」の建物があります。平成 19 年に金融機関の合併統合が進んで、この金庫は別な場所に統合されました。今も建物は残っていますが、営業はしていません。



この信用金庫の建物手前に奥に入る狭い道があり、奥に「万能塚」と書かれた看板があります。

その奥にこんもりとした塚と大きめの石が置かれています。

石岡と言えば、「万能（まんのう）」を忘れてはいけないようですが、今の人は知らないです。

私もよくわかりませんが、「農具万能（鋤くわ）は大変便利な鋤で備中鋤を改良し、「耕起・破碎・均平」すべてに使える 2 本～5 本歯の鋤である」となっています。

発明品ですが、特許も取っていないので誰でも作れたといえます。とても便利なので全国に広がりました。

この鈴木万能さんとの塚の関係が良くわかりません。

この「鈴木万能（鈴木平左衛門）」のお墓は市内の「常光院」にあります。自宅も香丸町の方にあったと聞いています。

この「万能塚」には、旧書に「万能塚は、今の万能の先祖にて、大和大峰山に信心して、それより万能と云う法号を得たり。この人の葬りたる故に、万能塚なりと云う。本姓は鈴木氏なり」書かれているようですので、万能の先祖が葬られたところと解釈できそうです。

まわりから、鉄屑などがでてきているので、ここで万能を制作していたのではないかと考えられます。

何とも歯切れが悪いが、こんな説明しか出てきません。

説明の中に「ズバイ」という地名が近くにあり「熱灰」のことだろうとなっていました。今後探れば、こちらは何か出てくるかもしれません。

更にその先を行くと「茶屋場住宅入口」という信号があります。